

景気循環と原理論 (上)

藤井速実

(文理学部・経済学研究室)

Relation between the Trade Cycle and the Principles of Political Economy

by

Hayami FUJII

目次

序	IV 循環の法則と原理論 (2)
I 循環の局面構成と構造類型	—— 恐慌の周期性視点 ——
II マルクスにおける循環の概念 (以上本巻)	V 循環の法則と原理論 (3)
III 循環の法則と原理論 (1)	—— 経済構造と段階視点 ——
—— 蓄積論視点 ——	結語

序

戦後の一時期わが国では、景気循環はもはや存在しなくなったという声が生気に聞かれたことがあったし、今日でもいわゆる「成長論者」といわれる人々にとっては、循環は過去の遺物とみなされているようである。そこには、第3の経済主体＝政府と中央銀行の適切な財政金融政策（いわゆるポリシー・ミックス）の弾力的運用によって、循環変動の波は変えられうるとするケインジアン立場がある。ところが、昭和33年度の『経済白書』はその副題に「景気循環の復活」をかけたて、循環の存在を明らかにしようとしたし、その基本的認識の発展のうえに、昭和37年度のいわゆる「転型期論」の構想が『白書』の中心的な分析課題となった。循環の存在そのものについては、われわれも『白書』とともに同じ認識基盤のうえに立っている。ただ、その「循環」の性格規定と認識の展開構造については、われわれと『白書』の間には一定の距離がある。そしてこの「距離」が実はここでは決定的な意味をもつのであるが、それは結局のところ、経済学の原理観、政策観、歴史観の根本的相違に根ざしているものといつてよい。端的にいえば、それはマルクス経済学と『白書』を隔てる距離である。尤も、そうはいつても、マルクス経済学における循環の概念構成は論者の間に必ずしも共通の市民権をもっているとはいえないのであって、したがって「距離」は仲々一義的には規定されない。われわれが経験した4つの戦後循環（昭和26～29年、29～33年、33～37年、37～40年）についての評価も決して一様ではない。もちろん、われわれはここで戦後循環の性格規定そのものを検討しようとしているのではなく、狙いはあくまでも原理的な抽象のレベルでの循環概念の確定であり、循環の法則性の解明である。それは資本制再生産、したがってまた資本制蓄積の法則、その構造と機能の具体的な運動形態として明らかにされる。それはまた一面では、いわゆる「原理」の形成の実体的な内容をなしている。「原理」における基礎的な諸範疇が迎える「上向運動」の帰結点は、いつまでもなく「プラン」におけるかの「世界市場恐慌」である。世界循環軌道の創出とその自立的な運動の理論的展開も、その深部において、これらの基礎的な諸範疇の「上向運動」と連結する。循環の法則の真に科学的な解明もこのような原理的な基礎的な諸範疇の「上向運動」と離れてはありえないのであって、この運動を資本制蓄積の内的矛盾の展開過程とし

て把えることによってのみはじめて明らかにされるであろう。そしてそのことによって改めて『白書』との間を隔てた「距離」の真相を知る手懸りがえられるであろうし、またそれをえたいというほのかな意図がそこに秘められている。

本稿の叙述構成の骨子は次のようになるであろう。まずその前半部分では、循環の性格と構造について若干の近代経済学者の見解を一瞥し、そしてこれとの関係においてマルクスの循環概念の内容とその地位を検討する。後半部分では、循環の法則を経済学の「原理」確立過程のメダルの裏をなすものとして、これを特に資本制的蓄積法則の作用形態の展開として明らかにする。そして最後に、循環の法則が資本主義の世界史的発展段階において示す照応性と形態変化について言及してみたいと思う。

I 循環の局面構成と構造類型

景気循環（産業循環）はそれを構成する局面の序列交代の運動であるから、循環が問題とされる場合には、必ずといってよいくらい、局面構成について論及されるのがふつうである。ここでも、それを簡単に一瞥しておくのが便利であろう。

循環局面の構成については、これまで様々な見解がみられたことは周知のとおりである。それは大凡次の5つの見解——2局面、3局面、4局面、5局面、6局面——に分類できるであろう。われわれは循環の局面構成に関するあらゆる論者の見解をここで逐一披露しようとは思わない。局面構成の分類学的検討がここでの主題でないことはもちろんである。そこで、われわれは主題の展開にとって必要とされる若干の代表的な論者の見解にのみ課題を限定したいと思う。

1. 最初に2局面説と4局面説からはじめることにしよう。これらの間には密接な関係があるからである。まず、これらの代表としてはさし当り、J. A. シュンペーターと W. C. ミッチェルの名をあげることができよう。そこでまず、シュンペーターについて、シュンペーターの局面（段階）構成論は、彼の晩年の大著『景気循環論』¹⁾の中で詳細に展開されており、その構想は極めて複雑且つユニークであるため、実のところこれらを多少なりと説明するだけでも、かなりのスペースが必要となるだろう。なにはともあれ、シュンペーターにおける「均衡」、「発展」、「革新」等々の一連の概念が、彼の経済学体系との関連において明らかにされることが必須の前提となるのであるが、ここではそれらについての詳論は残念ながら割愛せざるをえないのである。ここではただその結論的部分を指摘するにとどめたい。それは次のようにいって差支えないであろう。すなわち、シュンペーターのいわゆる「純粋モデル」²⁾は、一般均衡の状態にある経済体系を基礎として設定されたものであるが、この「状態」に企業者による「革新 Innovation」³⁾が導入されるとき、景気循環の2局面——好況 prosperity と後退 recession——が現出する。これがシュンペーターによって経済的現実への「第一次的接近」⁴⁾とよばれるものであり、彼におけるもっとも単純な循環モデルである。この「第一次的接近」に更に「第二次波動」を導入することによって、一層現実への接近が試みられ、ここに4つの循環局面——好況、後退、不況 depression、回復 recovery（再生 revival）——が成立する。これが彼のいわゆる「第二次的接近」⁵⁾である。彼にとっては好況と回復は循環の積極的な局面であり、後退と不況は消極的な局面である。⁶⁾しかしまた、彼のいう循環の4局面構成という概念は、決して不変的・固定的なものではなく、可変的・流動的なものであって、現に彼は次のようにもいっている。「後退と（もし不況が起るなら）回復とは経済発展の循環過程の必要部分であるが、不況そのものはそうでない。……循環過程というものは、そのすべての本質的な様相にわたって、不況がなくとも論理的には完全なものであるだろう。不況がおこるかおこらないかは事実問題であり、……偶然的な事情にかかっている」⁷⁾と。ここに局面構成に関するシュンペーター独自の見解がある。不況（と恐慌）を循環の必須の構成要素とみなさないのは、

「循環」を単なる経済変動として扱っているからであって、それも究極的には彼の「循環」に関する基本理念が「均衡」の概念のうえに構築されていることと密接不可分な関係があるからである。

2. 次にミッチェルの場合について、彼はその龐大な名著“Business Cycles”全3巻⁸⁾の中で景気循環に関しておよそ考えられうるあらゆる場合について論及しているが、循環の局面構成については、その第1巻“Business Cycles: The Problems and Its Setting”の第4章第3節第3項「景気循環の諸局面」の中で4局面循環説——繁榮（好況）prosperity, 恐慌 crisis, 不況 depression, 回復 rivival (recovery)——を主張している。⁹⁾しかし、「恐慌」は景気循環の4つの局面の1つを表現するには「貧弱な用語」¹⁰⁾であるといい、より適切には「後退（なかだるみ）recession」とよぶべきであろうといっている。なぜなら、「恐慌」は「後退」の特殊な場合であって、一般的に循環の必須の構成局面として特徴づけることはできないであろうといっているのである。彼はもちろん、「恐慌」という言葉を放棄したわけでもなければ、その存在を否定したわけでもない。ただ、「恐慌」を循環の局面構成として一般的に定式化することは適切ではないとしているのである。したがって彼による循環局面の最終的な構成は、好況（繁榮）、後退、不況、回復の4局面ということになり、シュンペーターの局面構成と同一のパターンをもつことになる。尤も、それぞれの局面のもつ意味内容の把握の仕方、および循環の概念そのものについては両者の間にかんがりの相違があることをここで指摘しておきたい。この間の事情についてはあとで言及されるであろう。

3. 3局面説については、これを誰よりも早く主張したのはC. ジュグラーであった。彼は仏、英、米国の主として銀行業の数字、利子率、輸出入および価格等の変動の検討を通じて、循環を恐慌成熟の過程として扱え、これを3つの局面構成——上昇 développement, 爆発 explosion, 清算（整理）liquidation——から構成されるものと考えた。¹¹⁾シュンペーターは彼についてこうしている。「かれは、景気循環の領域で、理論、統計、歴史がどのように協同すべきかについての明確な観念をいだいた最初の人であった。かれの偉大な功績は、恐慌を背後においやり、恐慌の基底に、もう一つの、ずっと基本的な現象、すなわち、好況と整理（liquidation）——他の箇所でも指摘したように、かれは整理を好況期のでき事への経済体系の反応であると解釈した——とを交代させる機構を発見した、ということである」¹²⁾。つまり、シュンペーターは、ジュグラーが恐慌の周期性の発見に成功したということよりも、むしろ循環の局面（好況と整理）交代の機構の発見により高い評価を与えている。しかし、この「評価」には、あるいは異論の余地があるにしても、ともあれ、ジュグラーの場合、彼の著書の公刊された1862年という時点のもつ意味と3局面構成との間における一定の照応関係を考える必要があるであろう。彼の見解——それはのちにジュグラー循環の名をもってよばれるようになるのであるが——が19世紀の末頃になってやっと経済学者の認めるところとなったということも、それだけ彼の見解が早すぎた卓見であったといえないであろうか。

A. シュピートホフもまた基本的には3局面構成論者と考えてよい。彼はまず彼独自の「典型的循環」¹³⁾を考え、それを3つの基本的局面——不況 Stockung, 好況 Aufschwung, 恐慌 Krise——から構成されるものとする。ここで特に「基本的」局面というのは、シュピートホフにおいては、この3局面が更に区分され、不況は2つの段階——下降 Niedergang と（第1期）上昇 Anstieg——に、好況は3つの段階——（第2期）上昇 Anstieg, 最高況 Hochschwung, 資本欠乏 Kapitalmangel——に具体化されて、結局1循環は6局面構成をとりうるからである。¹⁴⁾ところで彼の基本的な局面構成を考える場合、一つの興味ある点は、彼における循環始点の把握の仕方である。彼は「典型的循環」の運動段階 Bewegungsabschnitte を示す「略表」においては、循環の始点を不況局面としながら、「本論」の展開にあたっては、好況局面を始点としている。そこには循環始点に関する二元論的把握がみられる。不況を始点とする循環のもつ難点は、彼によれば、不況→好況の交代・移行が他の場合に比べて「漸次的」であり、且つ「明確な境界がない」という点にあ

り、また好況始点の考えに立てば、不況→好況の移行が「切断される」という難点を伴う。¹⁵⁾ したがって、両者の弊害を「調整」するためには二元論の立場をとらざるをえないというのである。しかし、彼の場合、本質的には好況始点の立場に立っていると考えてよい。なぜなら、彼は循環の中心問題を「過剰生産」であると考えており、これを説明するためには好況始点が「最も便利」¹⁶⁾ だとしているからである。したがって、彼の局面構成論は、当然、好況、恐慌、不況の運動序列をなす3局面として理解することができる。なお、ついでなごらえば、わが国においては、宇野弘藏教授の『恐慌論』のうちに、シュピートホフ流の3局面構成がみられることは、われわれにとっではもはや説明の必要のない周知のことといえるであろう。

4. このほかにかつてハーバード経済研究所 (Harvard Economic Society) の中心的な存在であった W. M. パーソンズによる5局面説をあげることができよう。彼は基本的にはミッチェルの立場に立ちながら、好況→不況への移行・交代過程を更に2つの局面——「金融逼迫 financial strain」と「産業恐慌 industrial crisis」——に分割することによって結局、好況、金融逼迫、産業恐慌、不況 (depression, trough)、回復からなる循環の5局面構成を主張したのであった。¹⁷⁾ だが、ここでいう「金融逼迫」はミッチェルの指摘を待つまでもなく、好況→不況の移行過程に固有の現象ではなく、他の局面についてもみられる現象であり、また「産業恐慌」は「金融逼迫」を必ずしもその必須の先行局面とはしない。¹⁸⁾ ミッチェルはその例証の1つとして1923年のアメリカの場合をあげているが、むしろ産業恐慌はマルクスのいわゆる「資本の過多 Plethora」¹⁹⁾ をそれに先立つ必然的な随伴現象とみるべきであろう。その意味でパーソンズは基本的にはミッチェル流の4局面循環の立場に立っているといっても差支えないであろう。

5. 以上の簡単な素描からわれわれは今日の支配的な見解として4局面構成の循環を考へることができよう。しかし、同じく4局面といっても、それぞれの局面が内包している実質的な意味内容は、それが細部にわたればわたるほど論者の間に見解の相違が生じてくることも当然である。だが「内容」にたいする見解の相違もさることながら、実は具体的な循環をそのものとしてみれば、循環はすべてシュンペーターのいうように、「歴史的個体 historical individual」²⁰⁾ であり、厳密にはすべて、それぞれの個性に解消されてしまう性質のものである。たとえ局面構成がかなりはっきりした類似性を提示したとしても、全く同一の循環というものはそもそもありえないからである。われわれは「個性」を否定するどころか、それを十分に認める。われわれが否定しようとしているのは、理論的に想定された理想的・典型的モデルとしての循環——具体的には19世紀20～60年代のイギリスにおいて資本主義の純化傾向に即して展開された産業循環——を1つの「典型的循環」として考へる場合、かかる抽象化された論理次元においてもなお且つ循環の「個性」をもちだし、その故に循環の局面交代の合法則性を否認しようとすることにたいしてである。

ただここで注意を喚起しておきたいと思う一点は、循環の「歴史的個体」という場合の意味の重層性についてである。すでにのべたように、「個性」そのものはすべての循環にとって絶対的であり、無条件的である。循環を個そのものとしてみる限りこれは完全に正しい。しかし、循環を資本主義の世界史的発展段階に照応的にみた場合、そこにある何らかの形態上の変化が、一定の傾向性をもって現われていることを発見できるであろう。例えば、恐慌の周期が段階照応的に次第に短縮化の方向にあること、あるいは循環の振幅が例外を別とすれば傾向的にマイルドの方向をとるといった如きである。ところが更に形態上の変化は歴史的な発展段階に規定されるだけでなく、各国の経済組織や経済構造によっても規定される。工業国と農業国、そして工業国の中でも重化学工業と軽工業とへの傾斜の深さと広がりによって、そこに当然、循環の形態のうに独自の個性が発揮されるであろう。こうして循環の「歴史的個体」は、まず資本主義的経済発展の世界史的段階によって、また経済の構造的性質によって、更にまた戦争、天災、動乱等々の経済外的要因によって三重

に規定される。このうち、経済外的要因は全く個別的であり、偶然的であり、その発現形態は実に千差万別である。それ故これらは循環の局面交代の合法則性が、そのものとして問題にされるとき、捨象せざるをえない。²¹⁾したがって、われわれにとって「歴史的個体」が意味をもつとすれば、それはその「個体」が循環の合法則性の解明にかかわりをもつ限りにおいてである。「歴史的個体」はいまや段階としての個性(時間的個性)と経済構造としての個性(場所的個性)の二重の規定をうけとらなければならない。

19世紀20～60年代の恐慌がほぼ10年を周期として1循環を形成してきたということは、もっとも典型的な自由主義段階に特有な循環の個性を示しているものといってよい。シュンペーターのいわゆるジューガー循環もこの段階に照応的な循環として特徴づけることができよう。ただ、この循環は特殊段階的な循環にとどまらず、そのうちに超段階的な普遍的内容を包摂しうる機構を有するものとして、循環の法則、したがって「原理」形成の実体的基礎をなすのである。『資本論』の「原理」としての構築が、主としてこの段階のイギリスの経済過程にその実体的基礎を置いた点を考え合わせるとき、このことはもはや明瞭である。この段階の構造的特質をもった循環を特に「主循環 major cycles」とよぶのも「原理」的規定との関係を離れてはありえないのである。もちろん、帝国主義の古典的段階や現代的段階においては、かの主循環はその形態のうで段階照応的に何らかの変容を蒙るけれども、基本的には主循環の存在そのものは否定できないどころか、むしろその存立基盤の強固さを証明するであろう。

6. さて、循環の構造類型としては、ふつうこの主循環のほかに、約40ヶ月周期の小循環(短期循環・キチン循環)²²⁾と50～60年周期の長期循環(コンドラチエフ循環)²³⁾があげられるのであるが、これらを果して「循環」の名をもってよんでいかどうかは疑問のあるところである。ただ小循環の主導的な担い手とされる在庫投資の動向には、ある程度の規則性を認めてもよいであろう。それは主循環によって規定されるのであって、その逆ではないからである。ところが主循環は往々にして小循環との関係においては、その主導的規定性は後退し、その存在もぼかされることがある。それは小循環が経済政策と特に密接な関係をもつため、政策主体にとっては、眼前に展開される小循環の対症療法に関心の比重が移行し、その試行錯誤のうちに主循環の存在そのものが後景に遠のくことになりやすいからである。オーカーマンによれば、彼の見解には主循環も小循環もともにそれぞれの期間の長さがほぼ段階照応的に短縮化し、主循環の中にふくまれる小循環の数も多くなる傾向にあることが読みとられる²⁴⁾。いまこれらの考えを導入することが許されるならば、恐慌について次のようにもいうことができるであろうか。小循環における後退がいつものマイルドな形態ではなく、時に恐慌を伴う激烈な形態をとるのも、それは小循環における後退が主循環の後退と重なり合うために起ったためであり、ふつう恐慌とよばれるのは、この後退の同時的な二重結合によってもたらされる暴力的な資本の価値破壊を指すものといってよいであろう。なるほどシュンペーターのいうように、これに加うるにコンドラチエフ循環の下降段階を重ね合わせることも考えられなくもないが、ただコンドラチエフ循環では、生産面について必ずしも長波が看取されないということ、またこの循環それ自体が資本の再生産過程の内的・自立的な運動機構そのものによって生ずるものでない以上、われわれはこれを循環理論に積極的にくりこむことに難点を感じざるをえない。もちろん、われわれはコンドラチエフ循環と主循環との関係を全面的に否定するものではない。主循環において好況局面が不況局面に較べて比較的長い時期は、この時期が、ちょうどコンドラチエフ循環の上昇段階にほぼ対応していることを発見できるであろうし、反対に主循環において不況局面が比較的長い時期は、この時期がコンドラチエフ循環の下降段階にほぼ対応しているといえてよいであろう。

実に驚くべきことであるが、ここに興味ある事実を『資本論』の中に発見することができる。『資

本論』第1巻第4篇第13章第7節のイギリスの「綿業恐慌」を論じた箇所では、マルクスは1770～1815年までの45年間のうちに、綿業が不況または沈滞に陥ったのは、5年間である²⁵⁾、というのである。この数字にどこまで信憑性があるかは別として、もしそうだとすれば、あとの40年間は活況または繁栄の時期ということになる。これはちょうど、第1コンドラチエフ循環の上昇期(1780末～90年初—1810～17年)とほぼ符節を合わせている。コンドラチエフ循環の上昇期には、好況局面の持続期間が比較的長いということは、上の事例から疑う余地はない。マルクス自身は主循環とコンドラチエフ循環の一定の相関性を感知していたわけではないけれども、偶然とはいえ、なお一考を要すべき問題を残しているように思う。

ともあれ、われわれが景気循環の局面構成、その運動、機構、形態を問題とすると、循環のもつ構造的な類型把握の視点を一応考慮に入れる必要があるだろう。しかし、これらの視点を絶対化することは危険であり、循環の法則と原理論との関係についても、また主循環のもつ地位の確定についても科学的に正しい解明への道を禦ぐ結果になりかねないであろう。われわれはその「解明」への手懸をえる第一歩として、まずマルクスにおける循環の概念を検討することから始めよう。

*

- 1) J. A. Schumpeter, *Business Cycles : A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, 1939.
- 2) シュンペーター『景気循環論』, 吉田昇三監修・金融経済研究所訳, I, 202ページ(以下、ページ数は当該訳本による)。
- 3) これは彼の『経済発展の理論』, „Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung“ (1912)で、「新結合の遂行 Durchsetzung neuer Kombinationen」とよばれたものと同じである。ただ、「革新」というときには、「1つの新生産函数の設定」(『景気循環論』, 訳, I, 126ページ)として定義づけられるが、「新結合」という場合は「一定の生産函数中の……生産係数の経常的な適応をもふくむ」(同上, 126ページ)ものと考えられており、したがって後者では、表現が不正確となることを免れない。
- 4) シュンペーター『景気循環論』, 訳, I, 202ページ。
- 5) 同上, 213ページ。ただし、「第二次的接近」の完形的形態は、「第二次波動」のほかに更に次の5つの事実を追加しなければならない。(1) 継起的変動, (2) 成長, (3) 信用創造の拡大, (4) 誘発投資, (5) 競争と均衡の不完全性。
- 6) 同上, 220ページ。
- 7) 同上, 221ページ。
- 8) 第1巻, *Business Cycles : The Problems and Its Setting*, 1927. 第2巻は A. F. Burns との共著で, *Measuring Business Cycles*, 1947. 第3巻は *What happens during Business Cycles*, 1951.
- 9) ミッチェル, 前掲書, 第1巻, 春日井薫訳, 『景気循環 I 問題とその設定』525ページ(以下、ページ数は春日井訳による)。ただし、春日井訳では“Crisis”を「危機」と訳出しているが、われわれは慣用的に定着している「恐慌」という用語を使用することにする。
- 10) 同上, 529ページ。
- 11) C. Juglar, *Des Crises Commerciales et de leur retour périodique en France, en Angleterre et aux États-Unis*, Paris, 1862, pp. XII(introduction), 4.
- 12) シュンペーター『景気循環論』, 訳, I, 239—40ページ。ただし, (liquidation) は引用者による。
- 13) A. Spiethoff, Artikel „Krisen“ (Im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl., Bd. 6, Jena 1925), 望月敬之訳, シュピートホフ『景気理論』110ページ(以下、ページ数は望月訳による)。ここでいう「典型的循環」は決して観念的抽象によるものではなく、「歴史的経験とできるだけ緊密な連繫を持たせて構成したものである」(同上, 110ページ)。
- 14) 同上, 111ページ。
- 15) 同上, 110ページ。
- 16) 同上, 110ページ。
- 17) W. M. Persons, *Measuring and Forecasting Business Cycles*, 1920, p. 34.
- 18) ミッチェル『景気循環 I 問題とその設定』, 訳, 526ページ参照。
- 19) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. III, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1965, S. 261, 長谷部訳『資本論』第3巻, 荷本文庫版, ©364ページ(以下, *Das Kapital* と略称し, ページ数は原本・訳本ともにこれにしたがう)。いうまでもないことであるが, ここでいう「資本過多」は, いわゆる資本過剰 (Überfülle od. Überfluß) や資本の過剰生産 (Überproduktion) の範疇

とは一応区別されたものであり、利潤率の傾向的低落の過程でみられる群小資本に固有の随伴現象である。

つまり、貨幣形態のままで遊休し、貸付可能ではあるが、それ自身としては資本として機能しえない形態にあるものとして、群小資本に固有の「過多」である。そしてこの「資本過多」は、結局は信用を媒介として大資本に吸収されるのであり、パーソンズには、この観点で欠落しているため「金融逼迫」を「産業恐慌」の必須の先行段階として一般化しているという誤りを犯している。

20) シュンペーター『景気循環論』, 訳, I, 230ページ。なお、このほかに、Schumpeter, *The Analysis of Economic Change*, ("Readings in Business Cycle Theory", selected by a Committee of The American Economic Association, 3rd impression 1961, p. 2; シュンペーター「経済変動の分析」, バーバラ編, 後藤啓之助訳『景気変動の理論』上, 4ページ) 参照。

21) ここで「捨象」という場合には、決して「無視」ということを意味しているのではない。経済外的要因が「個性」の形成に一定の役割を果たすこと、そのことを「無視」したり「否定」したりしているのではない。時によっては、循環の性格を一変させることも十分にありうる。ただここでは、循環の「法則」定立にたいしてもつ規定要因の役割に制約づけられているため、偶然的な要因はすべてこれを「捨象」し、「法則」定立にたいして内的に作用する要因に限定せざるをえない。

22) 小循環 minor cycle または短期循環はほぼ3.5年(40ヶ月)を周期とする循環で、最初 J. Kitchin の次の論文 "Cycles and Trends in Economic Factors", *Review of Economic Statistics*, Vol. V (Jan. 1923) の中で、イギリス、アメリカの時系列(1890~1922年)を検討して発見されたもので、シュンペーターは、これをキチン循環の名をもってよんだ。しかし、この循環は、のちに W. L. Crum の論文によって確認され、シュンペーター自身、クラム論文が機縁となって彼の循環図式の一構成をみたので、彼はこれをクラム循環とよびたい気持であるといっている(シュンペーター『景気循環論』, 訳, I, 250-1ページ参照)。小循環は特に在庫品の変動として理解されるが、このほかに国際関係の変化、労働運動、経済政策上の変化も小循環を規定する要因としてあげることができよう。だが、小循環を理論的・合理的に説明するためには、経済過程自身による内発的な要因としての在庫品変動によって基礎づけられる必要がある。この意味で小循環はしばしば在庫循環 inventory cycle と軌を一にする場合が多い。在庫循環は自己資本と他人資本との構成割合如何によっても著しい影響をうけやすい。自己資本が僅少である場合、資本家は傾向的にできるだけ在庫品を低くおさえ、むしろ回転率の増大によって、運転資金を操作するであろう。したがって、需要が増大すれば、たちまち在庫品は底をつき、その価格は上昇する。また反対に、需要が減退すると、在庫品は累積し、したがって価格の低下をもたらす、ついにはダンピングとなる。自己資本率の低下は、在庫循環の期間を短縮化する傾向をもつといつてよい。

23) ロシアの経済学者 Nikolai D. Kondratieff (Николай Д. Кондратьев) は、次の論文 "The long wave in economic life", *The Review of Economic Statistics*, Vol. XVII, No. 6, Nov. 1935 (ただし、これは最初、次のタイトルで独文で発表された。"Die langen Wellen der Konjunktur", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. LVI, Nr. 3, 1926) で1920年代に主としてイギリス、アメリカ、フランスの物価、賃金、利率、外国貿易等について、これらの間に約50~60年の間期をもつような長期循環を検出した (cf. *Readings in Business Cycle Theory*, Selected by a Committee of The American Economic Association, p. 32, 前掲邦訳, 43ページ参照)。

第1長期波動	{	上昇期	1780末~90年初	—	1810~17年
		下降期	1810~17年	—	1844~51年
第2長期波動	{	上昇期	1844~51年	—	1870~75年
		下降期	1870~75年	—	1890~96年
第3長期波動	{	上昇期	1890~96年	—	1914~20年
		下降期	1914~20年	—	

ちなみに、長期波動(循環)についてのシュンペーターの見解をみるに、その発生理由として、彼は第1長波(1790~1842年)をいわゆる産業革命(特に紡績・製鉄業に影響大)に、第2長波(1842~97年)を鉄道輸送の発達(世界鉄道化時代)に、第3長波(1898年以降)を自動車、電力、化学工業の発達に関連づけて説明している。

24) J. Åkerman, *Ökonomischer Fortschritt und ökonomische Krisen*, Wien, 1932, S. 78 のアメリカの事例についての図表を参照。それによると、1865~1900年までに4つの主循環、9つの小循環があり、この間の主循環の平均期間は8.75年、小循環のそれは3.9年、したがって1主循環の中に2.25の小循環がふくまれている。これにたいし、1900~31年については、主循環4、小循環10、主循環の平均期間は7.75年、小循環のそれは3.1年、したがって1主循環の中に2.5の小循環がふくまれている。ちなみに、シュンペーターによれば、歴史的、統計的にみた場合、1主循環は3つの小循環をふくんでおり(シュンペーター『景気循環論』, 訳, I, 257-8ページ参照)、また「概して、キチン循環は、イギリスでよりもアメリカで一層よくあらわれるし、ジュグラー循環はイギリスでよりもドイツで一層よくあらわれる」(同上, 253ページ)と指摘している。

25) *Das Kapital*, I. S. 477, 訳③730ページ参照。

II マルクスにおける循環の概念

1. 言葉の厳密な意味における循環の概念をいつ頃からマルクスが抱いたかについては、われわれはいまのところ明確な答えを知らない。ただ少なくとも1850年代の初期には、この概念をわがものにしていただけは確かである。マルクスは1852年11月1日付の『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』誌上で『貧困と自由貿易——迫りくる商業恐慌』と題して、その中で次のように述べている。「よく知られているとおり、現代の商工業は、5年ないし7年の周期的な循環をとおり、その循環のなかで、閑散——ついで好転——強気の増大——活況——好況——熱狂——過剰取引——激動——逼迫——沈滞——苦境という、規則的な順で起こるさまざまな段階を経て、そしてもういちど閑散に終るのである¹⁾」。ここでは循環局面の段階的経過が、その進行の序列にしたがって現象記述的に11の言葉で表現されている。好転、強気の増大、活況は、いわゆる活況局面として、好況、熱狂、過剰取引は好況（繁栄）局面として、激動、逼迫は恐慌局面として、また沈滞、苦境、閑散は不況局面として、それぞれ内容のうえからみて一括的にとらえて差支えないであろう。われわれはここに、未整序ではあるが実質的には、活況、繁栄、恐慌、不況からなる循環の基本的局面の認識にたどりついているように思う。事実、マルクスは同じ『トリビューン』誌上で、循環を3つの基本的局面で扱っている。すなわち、1834～7年好況、1838～42年恐慌と沈滞、1843～6年好況、1847～8年恐慌と沈滞、1849～52年好況²⁾ という、ここで列挙している例証をみれば明らかである。ただ、循環の概念ということであれば、循環局面の構成とその運動序列をどの程度理解していたかはともかく、マルクスとエンゲルスは、すでに1848年の『宣言』の中で、恐慌の周期性の存在を指摘している。³⁾ このことは、マルクスが恐慌を循環の中のもっとも基本的・中心的な局面として理解していたと考えてもよいのではなかろうか。恐慌の周期性がすでに発見されていたということは、恐慌と恐慌を繋ぐ過程がはっきりした循環局面の序列構成の形ではないとしても、少なくともこれに近い何らかの形で把握されていたということが十分に推論可能であろう。われわれはここに、循環の萌芽的形態を見出すことができる。これはマルクスにおける循環概念の感性的認識の段階とあってよいであろう。

2. 1857～8年の時点になると、いわゆる「産業循環 Industriezyklus⁴⁾」なる概念もたんに言葉としてでなく、10年周期の恐慌をもつ循環として、内容的に一層深化された形で理解される。マルクスが52年時点で1循環の長さを5～7年と理解したのに較べると、57～8年時点では循環の実体認識が一層客観化されてきている。それは1つには、57年恐慌によって更に経験が豊かになったこともあるであろう。50年代の初期に、マルクスが循環という場合、それはどちらかといえば、流通視点に比重を置いた「商業循環⁵⁾」である場合が多く、生産視点をもふくむいわゆる産業循環の概念はやっと50年代の後半になって定着してきたようである。この段階ではすでに、25年、36年、47年、57年と5回の循環性恐慌を経験しており、このことがマルクスの循環理論を大きく前進させたことは間違いない。確かにこの段階ではすでに産業循環の典型的な形態の把握が、ほぼ完成された形で示されている。循環運動の内的メカニズムがこの段階でどの程度把握されていたかは必ずしも明確ではないとしても、産業循環が資本の総再生産局面 Gesamtproduktionsphase と関連し⁶⁾、固定資本の更新期間が循環の重要な一契機⁷⁾として把握されているところをみれば、マルクスはこの段階ですでに循環分析の中心視点を正しく理解していたとあってよいであろう。実際、『資本論』における展開もこの視点に立っているからである。

3. さて、『資本論』においては、産業循環について随所で言及されているわけであるが、ここではまず循環の局面構成についての検討からはじめることにしたい。

『資本論』でも循環の局面構成については必ずしも統一的に整序されているとはいえないけれど

も、それでもかなり整序されてきていることは事実であり、基本的に4局面構成をとっているといわれてよいであろう。マルクスは活況という場合、Lebendigkeit といったり、Belebung といったりしているが、しかもたんにこれを独立的にいうのではなく、mittlerer Lebendigkeit⁸⁾ (中位の活況)とか、wachsende Belebung⁹⁾ (増大せる活況)とかいって、何らかの限定された意味を付与している。この点で活況局面は他の局面と違った意味合いをもっている。次のいわゆる繁栄(好況)局面については、3つの用語が用いられていて、Prosperität¹⁰⁾ (繁栄)、Produktion unter Hochdruck¹¹⁾ (高圧のもとでの生産)、Überstürzung¹²⁾ (ごったがえし)などがそれであって、この場合は、繁栄局面の展開場面の状況を単一的・一括的に特徴づけているだけである。ここでは活況局面のように、局面の移行段階を一層分化して考えようとする意図は全くみあたらない。第3局面としての恐慌(Krise)も、それが単独で用いられる場合は比較的少く¹³⁾、しばしば過剰生産Überproduktion¹⁴⁾とならべて用いられている。また時には、Krise といわないで、Krach¹⁵⁾ (破局) といったり、Schwindel¹⁶⁾ (眩惑) といったりしている。最後の第4局面としての不況は、Stagnation¹⁷⁾ (沈滞)、Abspannung¹⁸⁾ (弛緩)、Zustand der Ruhe¹⁹⁾ (静止状態)、Zustand der Abspannung²⁰⁾ (弛緩状態)など、いろいろに表現されている。これらの間には、かなりのニュアンスの相違がみられるのであって、例えば Zustand der Ruhe という場合は、それがそのまま Stagnation そのものを意味しているというよりは、Stagnation から Lebendigkeit または Belebung の第1段階に意味の比重を移しているように思われる。というのは、この段階を出発点として次の局面を wachsende Belebung として特徴づけており、最後の局面を Stagnation としているところをみると、この段階は Stagnation の末期あるいは Belebung の初期段階にあると考えるのが妥当であろう。同様に Abspannung とか Zustand der Abspannung とかいう場合でも、これらは Stagnation とは若干のニュアンスの相違がある。『資本論』では循環の始点を Stagnation で始めている叙述はどこにもなく、Abspannung, Zustand der Abspannung, Zustand der Ruhe, mittlerer Lebendigkeit をもって循環の始点としている²¹⁾。これらの事情を考慮に入れると前述の「ニュアンスの相違」は実は「ニュアンスの相違」以上の意味合いをふくんでいるともいえるであろう。

ともあれ以上にみられるように、表現上の不整合はあっても、循環の内容に即していえば、基本的には1循環を4局面——活況、繁栄(好況)、恐慌、不況——から構成されたものとして理解してよいであろう。

4. 次にマルクスにおける循環の「型」把握について若干の検討を試みてみよう。循環の概念という場合、そこには当然、循環が時間的経過のうち自己をあらわにしてくる形態とそのメカニズムが明らかにされる必要がある。ここではその形態が問題となるわけであるが、しかしただ一口に形態といっても、実は形態自身が重層的な意味の構造をもっている。すなわち、循環の各局面の時間的長さ、一循環単位の時間的長さ、局面交代の移行の急緩等々の形態がそれである。ふつう形態という場合は、これらの総体概念であるが、時にそれぞれに固有の形態規定性を明確にしておく必要がある。たとえば1循環単位そのものの時間的長さの変化が、形態の変化として問題になるとき、各局面相互の時間的長さの変化や局面交代の移行過程の特徴的变化をもって形態の変化としたのでは、前者の意味での形態変化を的確に説明したことにはならない。形態が総体概念として問題になる場合と、固有の形態規定性をあらかじめ付与されている場合とでは、その論理的展開のうえで形態規定性の混同があってはならない。われわれは、ここで総体概念としての形態規定を便宜的に循環の「型」とよぶことにする。したがって型はいくつかの形態に分化するが、差し当り1循環単位の時間的長さとして規定された形態の変化に問題を限定する。更にまたここでは便宜的に1循環の期間を恐慌→恐慌のいわゆる恐慌循環の周期(期間)で捉えることにする。もちろん原

則的には、循環の期間は活況局面を始点とし、不況局面を終点とする、いわゆる活況循環の期間で把えるべきであり、また実際、現実の循環においても、恐慌循環と活況循環の各期間は必ずしも等しくはない²²⁾。ただここでは、あくまでも便宜的に両者を等値とするもっとも理想的な循環の理論モデルを想定している。

〔a〕 マルクスは自分自身で「完全に校閲」²³⁾したロシア訳『資本論』のフランス語版第1巻第7篇第25章「資本制蓄積の一般法則」の中で次のようにのべている。「これまでのところでは、このような循環の期間は10年か11年であるが、しかし、この年数を不変なものとするべき理由はなにもない。反対に……この年数は可変だということ、そして循環の期間 *la période* はしだいに短縮されるということを推論せざるをえないのである」²⁴⁾。マルクスがこの第1巻の校閲を完了したのは、1875年1月末²⁵⁾の時点であり、いわゆる73年恐慌の渦中であつた。そしていままた、マルクスはこの「渦中」にあつてラヴロフ宛にも先のフランス語版で示した内容と同じような意味の手紙を送っている。「一般的恐慌の周期の短縮は注目し値います。私にはこの周期の長さを不変量と考えたことは決してなく、いつも、1つの漸減量と考えていました。しかし、それがその減少運動のかくも明瞭な徴候を呈していることは、かくべつ喜ばしいことです」²⁶⁾。

さて、事実はどうであつたか。周知のように1825年の循環性一般的過剰生産恐慌以来、一般的恐慌は1837年、47年、57年、66年、73年、82年、90年と続き、今世紀にいつてからは、1900年、1907年、14年、21年、29年、37年…というふうが続いている。いま恐慌の周期を5回ずつの移動平均でみると、1825～66年で10.25年、1866～1900年で8.5年、1900～29年で7.25年というふうに、ここでは明確に短縮化の傾向が読みとられる。先のマルクスの見解はみごとに的中している。よく観察すると、これらの「漸減量」は、資本主義の世界史的発展段階にはほぼ照応的な結果を提示しているように思う。もちろん、マルクスの主要な分析対象は、自由主義段階に典型的な、いわゆる「古典循環」²⁷⁾であるため、彼において、どこまで段階照応性が認められたかについては大いに問題が残るであろう。ただ73年恐慌の現実が、この点について彼に1つの示唆を与えたことは間違いないであろう。しかし、この「示唆」が循環期間の短縮化傾向をたんなる「洞察」としてでなく、段階照応的な1つの「理論」にまで高められたものであつたかどうかについても、やはり問題が残されるであろう。現にマルクスは1878年時点において、73年恐慌をいわゆる「慢性的恐慌 *chronic crisis*」²⁸⁾として特徴づけているが、しかしその翌年になってさえも、彼はこれをもって特殊「段階」的な循環に特有なものとして、循環理論の一般的定式化を試みるのは時期尚早だとしている²⁹⁾。ようやく1880年になってはじめて、マルクスは「段階」の概念を明示し、これを循環の「理論」にくくりこむ意図を示している³⁰⁾。もちろん、ここでは展開されるべき理論の具体的な内容はまだ何ら与えられてはいない。こうしてみると、先に73年恐慌の渦中で示した循環期間短縮化の「推論」は、「段階」規定との関係でできたものではなく、本質的には依然として「古典循環」の運動機構、就中その骨格としての固定資本再生産の運動機構に根ざしていたといつてよい。この「運動機構」の展開形態、すなわち資本の有機的構成の高度化という発展の原理的基盤のうえに立っていたのである。つまり、彼の「推論」の根拠は端的にいえばこうである。生産力の発展は資本の有機的構成の高度化のうちに集中的に表現される以上、固定資本再生産の規模はますます増大せざるをえない。しかし同時に、構成高度化が生産構造の重層化の進展と資本蓄積の増大テンポのうちにに行なわれるとき、資本の競争は固定資本設備の陳腐化を促進させ、ここに大量の「道徳的磨損」を発生させる。このことは必然的に固定資本の減価償却率の全社会的規模での増大を誘発し、その結果、耐用年数の短縮化を助長することとなる。生産力発展をこのような固定資本再生産の運動機構のうちにみたマルクスにとって、彼が循環の期間を1つの「減少運動」の中において把えたことは、けだし当然のことであつたといえるであろう。

〔b〕ところがこれまでにみえてきた循環期間の短縮という傾向的な形態変化は、いわば「主循環」についてのものであった。だがマルクスにおいては、循環とははたして主循環のみであったろうか。もしそうであるとすれば、それは如何なる性格の主循環として規定すべきであろうか。マルクスは先にのべた1852年11月1日付の『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』誌上では、循環期間を5～7年とみており、『エコノミスト』の統計によって、これを裏付けようとしている。だがその結果には若干のずれがある。すなわち、例証では1834年を始点(好況)とする循環は、42年を終点(沈滞)としており、また次の循環は1843年～48年であった。前者では9年、後者では6年である。マルクスのいう5～7年とは若干異なるにしても、ただここで注目すべきことは、この段階では循環期間が必ずしも近似的に等しい値を示さず、現実には3年という多少長いずれをもっていることである。つまり、周期がまだ正確にある一定の期間に定着していないことである。このことは実は今後重要な問題をはらんでいるのである。ふつうマルクスの循環は10年循環だといわれているが、ただこれを無条件的・絶対的に把えることは、実はマルクスの循環概念を矮小化することになりはしないかと思う。大切なことは、10年循環をマルクスの循環概念の全体像の中で明確に位置づけることである。マルクスは決して10年周期の正常的で単純な循環をのみ絶対化したのではなく、実はあとにみられるように若干の動揺を内包する特殊的・奇形的な循環の存在を十分に認めている。もちろん、彼にあっては主循環が循環分析においてあくまで中心的・基礎的なものとして設定されていることはいうまでもない。

さて、マルクスは先にふれた『資本論』第1巻第4篇第13章「機械と大工業」の第7節で1770年から1863年に至るイギリス「綿業恐慌」の歴史を「一瞥」している³¹⁾。それによるとマルクスは、いわゆる循環性一般的過剰生産恐慌のほか、後年エンゲルスをして「中間(的)恐慌 Zwischenkrise」³²⁾とか「後産的恐慌 Nachkrise」³³⁾とかいわしめた恐慌の事例をいくつかあげている。マルクス自身は、これらの恐慌を「特殊的恐慌 besondern Krisen」³⁴⁾とよんでいるが、それらは恐慌の「内容と範囲からみて」、「分散的・孤立的・一面的」³⁵⁾な性格をもつ恐慌であるという点で、一般的恐慌と区別されるべきである。それらの例証として、1830年、1841～3年(中心42年)、1851年、1854年、1862～3年をあげている。いまこれらを一般的恐慌の間に介在させてみると、1825年、30年、37年、42年、47年、51年、54年、57年、62～3年、66年となつて、いかにも52年当時のマルクスの指摘した「5～7年」循環の妥当性を立証しているかにみえる。しかし、念のためにいっておくが、マルクスはこれらをすべて「特殊的恐慌」という言葉でいっているのではなく、むしろ例の「綿業恐慌」の中では一般的恐慌以外はすべて「恐慌 Krise」という言葉を直接用いずに、例えば大窮境(großer Notstand, 30年)とか、大窮乏(großes Elend, 43年)、あるいは、物価下落・賃金低下(51年)、市場充溢(überfüllte Märkte, 54年)等々の言葉が用いられている。もちろん、これらの事態が実質的に恐慌状態を意味していることは確かであり、マルクスはここでは課題に制約されて恐慌を労働者の生活実体の視点においてみているという、ただそれだけのことである。

〔c〕このことに関連してわれわれはエンゲルスの見解にふれておく必要があるであろう。エンゲルスは彼自身が行った『資本論』第3巻第5篇第30章「貨幣資本と現実資本Ⅰ」の例の「脚註」の中で、5年循環は1815～47年までであり、それ以後67年までは「決定的に」10年循環であること、そして67年恐慌以降は1つの「転換」が生じて、循環は10年ごとの「急性的形態」から「慢性的な・一層長引いた」形態へと変化した³⁶⁾、と指摘している。エンゲルスがこの「脚註」を書いた正確な日付は分らないけれども、少なくとも第3巻の「序言」執筆の1894年10月4日以前である。エンゲルスはこの「脚註」とほぼ同じ趣旨の内容を彼の若き労作『イギリスにおける労働者階級の状態』の「1892年ドイツ語版への序言」の中で次のようにのべている。「本書の本文では、大産業恐慌の周期は5年である、と述べられている。これは、1825年から1842年までにおこった諸事件の経

過から、外見上明らかとなった期間の算定であった。しかし、1842年から1868年までの工業の歴史は、真の周期は10年であること、中間恐慌は副次的な性質のものであって、1842年以降はしだいに消滅したことを証明している。1868年以後、この事情はふたたび変化した³⁷⁾。そして、この「事情」の「変化」について、同じ「序言」の中で更に次のようにのべている。「…1つの方向転換が生じた。1866年の恐慌は、事実、短期で軽微な活況を1873年ごろともないはしたが、しかしそれは長つづきしなかった。事実われわれは、恐慌のおこるはずであった時期、つまり1877年か1878年には、完全な恐慌を経験しはしなかった。だがわれわれは、1876年このかた、いっさいの支配的な工業部門が慢性的な停滞状態に陥っているなかですごしている。完全な崩壊もやっこないし、またわれわれが恐慌の前後には当然もつ権利があると信じていた、待望ひさしい好況期もやっこないのだ。非常にひどい沈滞、あらゆる事業にたいするあらゆる市場の慢性的過充、これこそわれわれが、ほぼ10年このかた経験してきた状態である³⁸⁾。

みられるようにここには若干の食違があるほかは、「脚註」と「序言」との間には論旨が一貫している。「序言」では「1825年から1842年まで」を5年循環としているが、年代については、われわれはむしろ「脚註」でいっているように「1815年から47年まで」というべきが一層正鵠をえているように思う。エンゲルスは「序言」でも「脚註」でも、67年（あるいは68年）の大恐慌以降、循環の形態が「変化」し、1つの「方向転換」が生じたとし、その「転換」の内容を恐慌・停滞の「慢性化」現象として扱った。「転換」の内容については、ここでは（「序言」と「脚註」）少くともこれ以上論及されていない。しかし、われわれは、そこにいま1つの「内容」を付与すべきだと考えられないであろうか。エンゲルスは循環の形態変化の時点を3段階に分けて、第1段階は1815～47年の「5年循環」、第2段階は1847～67年の「決定的」な「10年循環」、第3段階は1867年以降の「慢性的な恐慌と停滞」の段階として特徴づけている。そして、この第3段階については、「序言」の中で「1868年以後、この事情はふたたび変化した」といっているのであるが、われわれはこの「ふたたび」の意味内容をどう理解すべきであろうか。エンゲルス自身は先にもふれたように少なくとも「序言」と「脚註」の中では、「形態」が第1段階→第2段階で「変化」し、この「変化」が、第3段階で「ふたたび」「変化」し、その結果が「慢性的恐慌と停滞」だというのである。しかし実は、ここでいう「ふたたび」の意味は、いま1つの内容を含意している。それは彼が1882年1月25〔-31〕日付のベルンシュタイン宛の手紙の中で「純粋な取引所思惑に帰着させられる中間恐慌を、われわれはいま体験しています³⁹⁾」ということのうちに表わされている。つまり、中間恐慌は第1段階に固有のものではなく、第3段階でいま一度再現してくるのであり、したがって第3段階では実は二重の意味の「変化」、すなわち、恐慌の慢性化と中間恐慌の再現が生じたのである。もちろん、この段階では中間恐慌が厳密な意味で循環の「規則的な中間項⁴⁰⁾」とはならないにしても、それが再現するに至ったということ、そのことは間違いない。ところが、このことは、対マルクスとの関係における循環の把握にとって、1つの重要な問題を投げかけているのである。

〔d〕 これまでの経過から、もはや明らかなように、第2段階の循環における恐慌の事実認識についてマルクスとエンゲルスとの間には、明らかに食違が生じている。すなわち、エンゲルスは、第2段階では循環は「決定的（に）entschieden」10年であって、中間恐慌は存在しなかった、といっている。ところがマルクスは、この第2段階で3回の中間恐慌（マルクスはこの言葉は使っていないけれども、実質的には中間恐慌）が起ったことを指摘し、1851年と54～5年および62～3年がそれであるといっている。51年恐慌については、先にふれた例の「綿業恐慌」の中と、1851年2月3日付のエンゲルス宛の手紙で「迫りくる商業恐慌 die Handelskrise, die im Anzug ist⁴¹⁾」の到来を告げ、更にまた『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の中で「フランスは、1851年には一種の小さな商業恐慌に出会った。……イギリスでは商業上の破産が起こった。フランスでは4

月と5月に工業恐慌が絶頂に達したのに、イギリスでは4月と5月に商業恐慌が絶頂に達した」⁴²⁾と、二重・三重に、いわゆる「中間恐慌」の存在を確認している。同様に54年恐慌についても、『資本論』の例の「綿業恐慌」のところ、および1855年1月11日付の『新オーダー新聞』誌上で、その存在をはっきりと確認し、しかもそれが「1847年や1837年よりももっと破壊的な規模で襲いかかってきている」⁴³⁾と報告している。さしずめマルクスにとっては、54年恐慌はかの一般的恐慌の性格に近いものとしてすら受けとられているように思われる。その点エンゲルスが中間恐慌は「1842年以降はしだいに消滅した」といっているのとでは大きな相違である。62～3年恐慌も同じく例の「綿業恐慌」のところ、およびヴィーンのブルジョア自由主義的新聞『ディー・プレッセ』の1862年2月8日付⁴⁴⁾、同年9月27日付⁴⁵⁾、同年10月4日付⁴⁶⁾等の誌上ではっきり確認されている。

つまり、マルクスの場合、事実上の中間恐慌は、第1、第2の各段階にすべて存在したという点において、エンゲルスと著しく異っている。われわれはいま、67年以降(第3段階)、中間恐慌が「再現」したとするエンゲルスの見解に立って、これをマルクスの見解と接合させるならば、中間恐慌は、すべての各段階を通じて、いわゆる主循環の中に原則的な「中間項」として、その存在を一般的に確定することが可能となるであろう。ここに「原則的」という意味は、かの「規則的な中間項」という場合に含意されている、いわゆる「5年循環」の規則性を意味するのではなく、主循環における中間恐慌の発生そのものが「原則的」であるという意味である。現に1847～57年の1循環の中で、中間恐慌は2度(51年、54年)発生したのであり、そこには何ら周期的な「規則性」はみられない。ただ、中間恐慌の発生そのものが「原則的」であるというのである。

さて、エンゲルスの中間恐慌について疑問に思われる一点は、何よりもまず、中間恐慌がなぜ第2段階(47～67年)で「しだいに消滅」するに至ったのか、そして、67年以降になって一旦「消滅」したものが、なぜ「再現」するようになったのか。この間の内的関連はどう説明されるべきか、ということである。この「関連」について、エンゲルスに全く説明がないわけではなく、先にあげた1883年5月10日付のベーベル宛の手紙でほんの一言だけふれられている。そこでは現在になって、「1847年以前とおなじように、過剰生産がいっそうはやく現われはじめた」から、「ふたたび5年ごとの中間的恐慌が舞台にあらわれ」ただとっている。確かに、過剰生産の発生が早まれば、恐慌の到来を早めることになるのは当然である。だが問題はなぜ過剰生産の発生が早まるのか、また第2段階では、第1段階よりも生産力が一層発展し、過剰生産発生の機構的基盤は強化され、したがって、過剰生産の早期発生の可能性は一段と深化しているにもかかわらず、「なぜ」この段階で中間恐慌が発生しないのか、ということである。エンゲルスの説明は、これにたいして十分納得的とはいえない。エンゲルスが第2段階で中間恐慌が「消滅」したといったのは、彼において1つのジレンマを生むこととなったとあってよい。その点、循環にたいするマルクスの見解は、中間恐慌にたいする若干の曖昧さを残しながらも、全体としては首尾一貫したものであったと考えてよいであろう。

5. 以上のささやかな検討を通じて、マルクスにおける循環概念についての1つの小さな総括的展望を与えてみよう。マルクスは中間恐慌という言葉こそ用いていないが、実質的には中間恐慌があらゆる段階に存在することを指摘した。その点、エンゲルスがそれを特定の段階に限定したのとは著しい対照をなしている。中間恐慌が主循環の中に存在するということは、とりもなおさず主循環における活況・繁栄局面の上向きの展開過程が、一時的な「中絶」・「小休止」⁴⁷⁾を蒙ることである。そして場合によっては、たんなる「小休止」どころか、急激な下向をすら伴うのであって、それは例えば54年の中間恐慌にたいして与えたマルクスの評価を想起するだけで十分であろう。しかし、中間恐慌はそれによって新しい主循環の誕生、すなわち、その出発点 *Ausgangspunkt* をなすのではなく、主循環の基本的な発展軌道に制約されつつ、そこに1つの谷 *trough* を生み出して

いるにすぎない。中間恐慌はそれによって決して主循環と無関係に独自の別の循環軌道を設定する性格のものではない。

新たな主循環が自己の自立的な発展軌道を確立するためには、一般的恐慌による資本の全面的な価値破壊が前提され、循環の Ausgangspunkt から Anfangspunkt に至る過程で先進的企業の固定資本更新投資を主軸として循環の基本的性格が質的に規定されなければならない。いわゆる繁栄局面においては、この一応の質的規定をうけた基本的性格の軸線のうえに、更に拡大投資主導によるところの更新・拡大の複合された投資が行なわれる。この時点における更新投資はどちらかといえば、先進的企業以外の、いわば出遅れた一般的企業による場合が多く、したがって、この種の「更新」によって、循環の基本的性格は多少の影響を蒙ることはあっても、「性格」の基本的内容が変るといふことはありえない。循環の基本的性格は、それ自身に内在した矛盾が一般的恐慌において暴力的な爆発＝均衡点に到達するまで、循環の全体を支配する。中間恐慌は、循環の基本的性格の自己否定ではなく、あくまで一時的・経過のな——そして場合によっては激烈な下向を伴うことはあっても、ふつうは一時的・経過のな——形で、循環を攪乱させ、循環の局面交代を一層複雑にする。

確かに循環に作用する要因は極めて多様である。それには、よくいわれているように、いわゆる傾向変動（または構造変動）の要因（T）もあれば、季節変動（S）や循環変動（C）、更に不規則変動（I）の要因もあるであろう。具体的な循環の動態は、これらの総括として与えられるであろう。ところが、近代経済学者の頭の中では、この「総括」は、たんなる変動要因の寄せ集めであり、それはしばしば次のような時系列の構造式

$$F(t) = T(t) + S(t) + C(t) + I(t)$$

で示されることが多い（ t は時間）。ここでは、循環の規定要因が全く並列的な、たんなる構成的要因に分解され、要因相互の内的関連は少しも明らかにされない。仮りに要因相互の関係式がえられたとしても、それはたんに量的な関係であって、質的な関係は定式化できない。そのうえ、これらの個々の要因の1つ1つが、これまた多くの規定要因から成っており、それらのあらゆる変動を逐一フォローするならば、そこにはただ当然の結果として不規則な動揺がみられるだけで、一定の規則性などはじめからありようがない。こうして循環における局面交代の合法則性を否定しようとする道が準備される。ミッチェル流の近代経済学的手法は、統計学や数学のツールを用いて、一見いかにも科学的にみえるけれども、しかしその分析結果は、現実の循環の歴史を十分に説明することに成功していないようである。恐慌の周期性にかかわらしめていえば、理論分析と歴史との亀裂をそこにみることができからである。シュンペーターのいう、3つの複合循環（コンドラチエフ循環、ジュグラー循環、キチン循環）の類型把握も多くの優れた着想を生み出してはいるが、これらも結局は、循環概念を複雑にし、曖昧にするだけで、これらの間の有機的・内的関連の説明に十分成功していないし、またそこからは循環の局面交代の合法則性を正しく導き出していない。マルクスにはシュンペーター流の、いわゆる複合循環の類型把握はみられないけれども、かといって、単純で・正常的な主循環のみが構想されていたわけのものでもないことは、すでに先にのべたとおりである。マルクスにとって、循環にたいする問題関心のすべては、その法則的解明の一点に集中していたのである。彼にあっては、如何に多く語るかではなく、如何に「法則」を把握するかであった。実際、彼にとっては、循環の「詳しい分析はわれわれの考察圏外に属」⁴⁸⁾したのであった。マルクスの循環分析はこの文脈の中においてのみ正しく理解されるであろう。

最後に次節（Ⅲ）への移行について一言したい。マルクスの循環分析は、いわゆる「古典循環」に中心が置かれているけれども、しかし、そのことは却って循環の法則を発見することに有利な条件を提供したといえなくもない。古典循環の現実的な展開過程が近似的に法則定立の実体的内容

をなしていたからである。それは同時にまた経済学の「原理」の確立過程でもあった。なぜなら、「原理」の基礎的諸範疇の具体的発展は晚かれ早かれ循環の自立的な運動に収斂されるからである。それは、いわば資本の蓄積過程のメダルの裏側をなすものであり、循環の局面交代の運動は、蓄積法則の作用形態として具体化する。したがって循環の局面交代の合法則性は資本制蓄積の法則、機構、形態の有機的連繫と統一においてはじめて解明されるであろう。われわれはこれを次節(Ⅲ)での検討に委ねたいと思う。

*

- 1) 『マルクス・エンゲルス全集』, 大月書店版, 第8巻, 359ページ(以下、『マル・エン全集』と略称し、断りない限り、大月版による)。
- 2) 同上, 359ページ。
- 3) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』, 国民文庫版, 34ページ参照。
- 4) この言葉自身はすでに1852年3月に執筆を完了した『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』にも見られる(『マル・エン全集』, 第8巻, 181ページ)し、また1852年11月1日付の『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』誌上でも用いられており(『マル・エン全集』, 第8巻, 360ページ, 362ページ), 57年時点ではじめて登場したのではない。なお, K. Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, Berlin, Dietz Verlag, 1953, S. 608, 高木幸二郎監訳、『経済学批判要綱』Ⅲ, 671ページ参照(以下、Grundrisse と略称し、訳文もこれにしたがう)。
- 5) 『マル・エン全集』, 第8巻, 364ページ。
- 6) Grundrisse, S. 608, Ⅲ, 671ページ参照。
- 7) Marx・Engels, Briefe über „Das Kapital“, Dietz Verlag, 1954, Marx an Engels, 2 März 1858, S. 82, 岡崎次郎訳、『資本論にかんする手紙』, 国民文庫, 上, 75ページ参照(以下、Briefe と略称し、ページ数は原本・訳本ともにこれにしたがう)。
- 8) Das Kapital, I. S. 476, S. 661, II. S. 185; 訳③728ページ, ④981ページ, ⑥238ページ。
- 9) a. a. O., III. S. 372, 訳⑤111ページ。
- 10) a. a. O., I. S. 476, III. S. 372, S. 507; 訳③728ページ, ⑩511ページ, ⑩693ページ。
- 11) a. a. O., I. S. 661, 訳④981ページ。
- 12) a. a. O., II. SS. 185—6, 訳⑥238ページ。
- 13) a. a. O., I. S. 661, II. S. 186; 訳④981ページ, ⑥238ページ。
- 14) a. a. O., I. S. 476, III. S. 372, S. 507; 訳③728ページ, ⑩511ページ, ⑩693ページ。
- 15) a. a. O., III. S. 372, 訳⑤111ページ。
- 16) a. a. O., S. 507, 訳⑩693ページ。
- 17) a. a. O., I. S. 476, S. 661, III. S. 372; 訳③728ページ, ④981ページ, ⑩511ページ。
- 18) a. a. O., II. S. 185, 訳⑥238ページ。
- 19) a. a. O., III. S. 372, 訳⑤111ページ。
- 20) a. a. O., S. 506, 訳⑩693ページ。
- 21) 循環の始点については、多くの論者(例えば J. L. Schmit, F. Oelssner, Л. А. Мендельсон…)が、恐慌局面説をとっているが、これは明らかにマルクスの読みちがいである。これについては差し当り、久留間敏造『恐慌論研究』(増補新版)221—234ページ、拙稿「固定資本再生産と恐慌の周期性」(高知大学学術研究報告, 第15巻, 人文科学, 第9号)128—130ページ参照。
- 22) 活況循環と恐慌循環の区別と関連については、差し当り、拙稿「産業循環と恐慌の周期性」(高知大学学術研究報告, 第16巻, 人文科学, 第10号)参照。
- 23) 『資本論』フランス語版(Le Capital, Livre Premier, Tome Troisième, Éditions Sociales, Paris, 1950)の表題には“Entièrement Révisée Par L'Auteur”と記されている。
- 24) Le Capital, op. cit., p. 77. この箇所は最近の前掲ディーン版『資本論』では第1巻第7篇第23章第3節に編集者註として挿入してある。Das Kapital, I. S. 662参照。
- 25) 久留間敏造他編『資本論辞典』, 青木書店, 702ページ参照。また、1875年2月11日付のラグロフ宛の手紙でも、この時点では蓄積の諸章はまだ出版こそされていないが、すでに校閲が終っていることを示している。Briefe, S. 223, 訳(下), 260ページ参照。
- 26) Briefe, Marx an Lawrow, 18 juin 1875, S. 225, 訳(下), 262ページ。
- 27) 「古典循環」をどの時点で設定するかは、人によってそれぞれ違いがあるであろう。われわれは、便宜的になるかも知れないけれども、マルクスが「10年ごとの循環をなして運動するイギリス工業の発展期(1815—1870)」(Das Kapital, III. S. 517, 訳⑩709ページ)といっている時期の循環を「古典循環」とよぶことにしたい。先にのべた「典型的循環」は、この時期の現実の「古典循環」を理論的にモデル化したもので

- あり、現実に実在した循環ではない。また「主循環」という場合は、「典型的循環」の特にその期間の側面を把えており、いわば動的な性格をもっている。「主循環」は段階照応的に変化するものとして把えられる。
- 28) Briefe, Marx an Danielson, Nov. 15, 1878, S. 238, 訳(下), 278ページ。
- 29) 彼はこういつている。「この(恐慌)現象はこのたびは特異なもので、多くの点で以前のものとはちがっています。…だから、事態が成熟するまで現在の成行きを注視することが必要であり、その後にはじめてこの事態を「生産的」につまり「理論的に」、「消費する」ことができるわけです。」(Briefe, Marx an Danielson, Apr. 10, 1879, S. 241, 訳(下) 280ページ。ただし、()の説明は引用者による)。
- 30) Briefe, Marx an Domela-Nieuwenhuis, 27 Juni 1880, S. 253, 訳(下) 288—9ページ参照。
- 31) Das Kapital, I. SS. 477—8, 訳⑦730—1 ページ参照。
- 32) Briefe, Engels an Bernstein, 25 [—31] Jan. 1882, S. 270, 訳(下) 306ページ; エンゲルス『「イギリスにおける労働者階級の状態」の1892年ドイツ語版への序言』(『マル・エン全集』, 第2巻, 670ページ)。
- 33) Das Kapital, III. S. 569, 訳⑧783ページ。
- 34) K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Dietz Verlag, 1959, Teil II, S. 530.
- 35) a. a. O., S. 530.
- 36) Das Kapital, III. S. 506, 訳⑧693ページ参照。
- 37) 『マル・エン全集』, 第2巻, 670ページ。
- 38) 同上, 675ページ。ただし、傍点は引用者による。
- 39) Briefe, S. 270, 訳(下), 306ページ。ただし、傍点は引用者による。同じ趣旨の手紙(1883年5月10日付)をエンゲルスはベーベル宛に送っている。「…1847年以前とおなじように、過剰生産がいつそうはやく現われはじめた現在では、ふたたび5年ごとの中間的恐慌が舞台にあらわれる。」(『マル・エン全集』, 改造社版, 第21巻, 262ページ。ただし、傍点は引用者による)。
- 40) a. a. O., S. 270, 訳(下), 306ページ。ただし、傍点は引用者による。
- 41) a. a. O., S. 46, 訳(上), 30ページ。
- 42) 『マル・エン全集』, 第8巻, 180—1 ページ。
- 43) 『マル・エン全集』, 第10巻, 609ページ。ただし、傍点は引用者による。
- 44) 『マル・エン全集』, 第15巻, 440ページ参照。
- 45) 同上, 520—3 ページ参照。ちなみに、恐慌が如何に激しかったかは、その間における労働者の失業率をみても分る。62—3年のイギリス・ランカシャー木綿工業の失業率は完全・部分的失業を合わせると、実に75%に及んでいる(cf. T. Ellison, The Cotton Trade of Great Britain, London, 1886, p. 95)。
- 46) 同上, 524—6 ページ参照。
- 47) 『マル・エン全集』, 第8巻, 181ページ, 182ページ。
- 48) Das Kapital, III. S. 372, 訳⑧511ページ。

(未完)

(昭和43年9月30日受理)